

設備工事業

技能グランプリで心技体を磨き、新潟の住環境を守る

7-10 株式会社 千代田設備

新潟を中心に水回り設備業を展開

千代田設備株式会社は、昭和 40 年に社長の佐藤袁也氏が創業した水道配管工事等を営む会社である。

2010 年に創業 45 周年を迎える会社であるが、社長が起こした小さな会社から、今では本社と 4 つの営業所、6 つの関連会社を有す会社となり、新潟のライフラインを 24 時間 365 日守っている。

同社の特徴は、社長の意向で技能グランプリや技能五輪の出場に非常に力をいれていることである。

これまで、技能グランプリでは第 2 回大会（配管開催はこれがはじめて）から出場して、過去には 6 連覇を達成するなど素晴らしい成績を収めている。また、技能五輪についても平成 19 年に技能五輪国際大会の配管職種で銀メダル、平成 21 年にも同職種で敢闘賞を受賞するなど、こちらも素晴らしい成績を収めている。



千代田設備 本社

1 級技能士は技能グランプリ出場に必要なもの

同社にとっての技能大会は技能向上、人間力向上、精神力向上の能力開発、という位置付けである。同社が技能グランプリに出場したきっかけは、社員の望月氏から技能グランプリに出場したいという申し出があったからという。社長はこの申し出に日常業務の励みになると賛成して、出場を後押しした。出場した結果、望月氏は技能グランプリで第 2 位という成績を収めたが、2 年後位から同県から出る人になかなか勝てず、出るからには勝ちたいという社長の負けず嫌いに火をつけた。これ以降、千代田設備は積極的に技能グランプリ、さらに技能五輪への出場に力を入れていく。

技能グランプリや技能五輪で優秀な成績を収めた者が続々と出てくる職場では、次第に 1 級技能検定合格は当たり前ようになっていった。1 級に合格した社員が積極的に競技会へのチャレンジを希望するなど、自然と競技会にチャレンジする社風が確立してきたという。

平成 21 年 3 月現在、同社には 1 級配管技能士が 60 名、

2 級配管技能士が 25 名在籍している。

技能グランプリ 6 連覇。技能五輪も上位の常連

同社は第 12 回大会（平成 5 年）から第 17 回大会（平成 10 年）まで技能グランプリ 6 連覇を達成している。

この中でも社長が特に印象的だと語ったのは、同社が初めて優勝した第 12 回大会に出場した石井敏明氏であった。実は、第 11 回大会にも石井氏は出場したが、本番でミスをしてしまい、不本意な成績であった。このときに、社長と石井氏は夜遅くまで反省会を行い、社長自身も「男の肥やしは何くそだ。」と激励し、一緒に翌年へのリベンジを誓ったという。

そして、第 12 回大会で石井氏は見事優勝を果たし、快進撃はじまったのだ。今回取材に応じてくれた沢口氏も第 13 回大会で同じ千代田設備の石澤氏に敗れ、リベンジをと出場した第 14 回大会で優勝を果たしているのだ。その後、沢口氏は、建設マスターの受賞、同社初の技能五輪国際大会のコーチとしても活躍している。

とことん打ち込み、感謝と負ける悔しさを学ぶ

千代田設備の人材育成は、自社で設置した職業訓練校による人材育成とともに、技能グランプリ、技能五輪によって人間性を鍛えることが主眼に置かれている。

社長は、「普段の業務では難しいですが、競技会にむけて辛い練習でとことん打ち込み、結果がでなかった場合には真剣に悔しがって欲しいと思っています。人生そのものが競争ですから。」と技能グランプリや技能五輪への思いを厳しい眼差しで語ってくれた。また、「競技会でよい成績を収められれば、昔は周囲に迷惑をかけた社員でも両親や周囲が喜んでくれる。喜びを作り出す喜びを知って欲しい。これによって生き方が変わってくると思うので。」と競争の中でも生き残る強い技術と心、また周囲への感謝を促す言葉を口にしていて、このような強い心や周囲への感謝を促す社長の言葉が、競技会出場前になると、社内のいたるところに張り出されているという。

株式会社 千代田設備

- | | |
|---------------|------------------|
| ▶業種:設備工事業 | ▶設立:昭和47年 |
| ▶住所:新潟市中央区下所島 | ▶従業員:215名(関連会社含) |
| ▶代表者:佐藤 袁也 | ▶技能士:85名 |

技能士へのインタビュー

沢口 幸栄氏（56 歳） 1 級配管技能士

水道工事のプロフェッショナル

沢口幸栄氏は、第 14 回技能グランプリ（建築配管）で優勝し、平成 10 年には優秀施工者建設大臣顕彰（以下、建設マスター）を受賞している。まさしく水道工事のプロフェッショナルである。

沢口氏は中学を卒業後、溶接工としての時期を経て千代田設備に入社。つい最近まで現場の第一線で活躍していた。最近では、社内の社員の相談を受けるだけでなく、工業高校や専門学校で技術指導を行っている。

お客さんの感謝のため、自分の技能を磨く

沢口氏は、配管技能士としての業務への魅力を「ものをつくるたのしみがあることと、修理をしたときにお客さんが喜んでくれるので。」ととてもシンプルに答えてくれた。

同席した業務課長の山崎氏も「沢口さんは自分の仕事に非常に強い自信を持っています。昔一度、お客様から工事した水道がもれていると電話があった時も『絶対に違う。結露だ』との返答、現地で調べてもらったら、その通りでした。」と沢口氏の自身のこだわりや自信の一端を垣間見たという。

現在、沢口氏は、高校生や専門学校生の指導にも当たっている。主に、3 級の技能検定の実技試験レベルの技術指導を行なっているという。彼らは、熱心に沢口さんの技術に見入っているようで、「1 から 10 まで見せてやっているけれど、なかなかツメの部分が分からないようで、教え方にも苦労しています。」と社員に教えるのとは異なり、素人を教える面白さと難しさを感じているようであった。



指導の様子



技能五輪国際大会の様子

お客さんからの一言がきっかけで技能士に

沢口氏が技能士を目指したきっかけを作ったのもお客様であった。とあるホテルで水道管の修理工事の際、沢口氏が器用に 1 人でてきばきと修理をするのを見たホテルの担当者が沢口氏に、「何でもできて器用だけど、器用貧乏でもったいない。」といわれ、会社の中だけでなく、社外で自分の実力を確認することをすすめられたという。このとき既に沢口氏は 40 歳であった。

これをきっかけに、2 年後 1 級配管技能検定に合格した。その後、技能グランプリでの優勝、建設マスター受賞と着実に成果を上げていった。彼の実力はホテルの担当者が言ったとおり、確かなものであったのだ。

また沢口氏は、はじめて同社から技能五輪の国際大会に出場した際のコーチでもある。

国際大会の指導で苦労した点を尋ねると、「建築配管の国際大会では、日本で手に入らない素材があったり、採点ポイントが国内大会と異なります。そのため、自分たち指導員達がスイスの職業訓練校に出向き、国際大会向けの技能訓練を受けた。日本に戻って出場選手への指導を行ないましたが、指導には苦労しました。」と初出場の苦労を語ってくれた。

今後は後進の指導に

沢口氏は根っからの職人であり、インタビュー中にも時折、「いやあ、本音では教えたくない部分もあるんですけどね。」と職人としてのプライドと、これまでの自身の苦労がうかがえる部分もあった。現在は鉛管ではなく、多くがプラスチックであり、作業内容が劇的に変化しているものの、やはり手で作るのが基本だと沢口氏は語る。

その基本を伝える中で、「やってみせて、でもできない。その“もどかしさ”みたいなものは感じている。」と語っていた。ただ、もう一回やってみせるなど根気よく教えていくと「言えば言ったなりによくなるんですよ。」と後進の指導への手ごたえも感じているという。

この根気強さのようなものもまた沢口氏の職人としての気質であると感じた。新潟の厳しい気候条件の中、お客様のありがたうのために、これからも若手社員や学生の指導にまい進していったと欲しいと感じた取材であった。